

令和4年度 学校総合評価

6 今年度の重点課題に対する総合評価

これまでの授業改善に係る実践研究の成果をベースに、より一層の教員の指導力向上を図るとともに、学習のみならず、学校生活全般にわたって主体的・協働的に活動できる生徒の育成に努め、生徒の多様な進路実現を着実に支援する指導の改善・充実に重点的に取り組んだ。また、本校が育てたい生徒像（小杉高等学校グランドデザイン）に基づいて、生徒の自己評価（小杉高等学校 Graduation Policy）も行った。

(1) 基礎基本の徹底

将来の社会生活の基盤となる基本的な生活習慣の定着や、生活時間の自己管理能力の向上等の育成を重点として取り組んだ。1年間皆勤の生徒のはいるものの、天候や環境の変化、先を見越した余裕を持った主体的な行動がとれるようになるには、まだまだ改善の余地があると思われる。毎日生徒自身が行ってきた「健康セルフチェック」は生徒自身が自己の体調管理をするために役立っており、「スマホの長時間使用」を見直している生徒も多い。また、生徒会執行部と自律委員会、保健委員会が中心となり、スマホ使用についての統一HRを実施した。今後も、生徒自らが自分の生活や行動を振り返り、適切な行動を考えていくという態度を醸成していきたい。

(2) 実効性のあるキャリア教育の推進

3年間を見通したキャリア教育を計画的、継続的に行い、職業観や就業観を育み、進路意識の向上に努めた。上級学校訪問、大学学部学科調べ、職業研究、2年次進路研修、社会人班別講話等を実施し、1、2年生の8割以上の生徒が「進路選択の参考になった」と答えている。3年生も7割以上の生徒が「進路決定先に満足している」という結果であった。

(3) 多様な進路実現に向けた学習機会の充実

授業では、タブレット等のICT機器を日常的に活用している教員が6割以上となり、生徒に主体的に考えさせるアクティブラーニング型の授業が定着している。また、学校行事やホームルーム活動、委員会活動も、生徒会役員やクラス委員を中心に主体的に行う機会となり、自己達成感を持つ生徒が全校生徒の9割以上であり、生徒にとって進路実現に向けた学びの機会となっている。

(4) 教員の指導力・学校組織力の向上

今年度も引き続き、授業公開WEEK（互見授業）やICT機器活用や授業方法に係る研修会等を実施し、全教科連携のもとICT機器を積極的に取り入れるとともに、グループ活動やプレゼンテーションの機会を積極的に取り入れ、生徒が自らの考えや意見を相手に分かりやすく伝えようと工夫する積極的な授業改善が引き続き行った。

7 次年度へ向けての課題と方策

本年度は、「小杉高等学校グランドデザイン」を基に、各教育活動を通して、「身に付けさせたい8つの力（①実践力・②協働力・③探究力・④発信力・⑤創造力・⑥自主性・⑦人間関係形成能力・⑧自己管理能力）」を明確にし、その中で「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」の育成と涵養に努めてきた。しかしながら、まだ自ら課題を見つけ、深く思考し、仲間と果敢に解決に立ち向かう生徒の育成には課題が見られる。次年度も引き続き、全教職員で共通理解を図りながら取り組んでいく必要がある。

①重点項目	学習活動（学びに向かう生徒の育成）
②重点課題	主体的・対話的で深い学びを引き出す授業改善に向けた生徒・教員への支援
③現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的、対話的で深い学びを引き出す授業研究に取り組むため、「公開授業 WEEK」や「公開授業研究会」による研究・協議を通し、授業改善に取り組んでいる。 ・タブレットパソコンを教員・生徒が授業や評価で有効に活用できるよう、情報・ICT教育係が活用方法に関する支援を丁寧に行っている。 ・新課程学習指導要領に伴う観点別評価への対応は、実施方法の適正な在り方についての研究を今後も継続・進展させる必要がある。
④達成目標	授業改善の取り組みに関連して、①ICT機器の活用 ②観点別評価への対応 の2点について教員の自己評価を向上させる。（下記の方策各項目に関するアンケート調査を1学期当初と学年末に行い、年度当初との比較で明らかな向上が見られること。）
⑤方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の授業で ICT 機材の有効な活用方法を研究し、授業改善と指導力向上を図る。 ・観点別評価を踏まえた適切な評価の在り方に関し、職員に情報提供と研修を行う。
⑥達成度	<p>授業改善に向けた生徒・教員への支援の達成度を、下記2項目に対する教員の自己評価アンケートにより集計し、その向上の度合いが数値的にも明らかであること。</p> <p>①ICT機器の活用 ICT機器の日常的な使用（約59%→約62%）、学習評価に活用（約18%→約43%）、活用上の障害は特に無い（約41%→約57%）</p> <p>②観点別評価への対応 評価方法の理解（約41%→約64%）、評価基準ブックの活用（約46%→約68%） 集計結果からは主要な項目において自己評価の向上が見られた。</p>
⑦具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT研修会（①Form講習会10/14+② Jambord研修11/28）と公開授業研究会（11/11）の連携やICT支援員の積極的な活用（月2回AM・PMの質問・相談）により、職員のICT活用力がさらに向上した。 ・教育課程講習会の研修内容を共有し、校内の協議を充実させたことにより、観点別評価の方法に関する本校の方針が定まった。
⑧評 価	<p>B</p> <p>①ICT機器の活用（授業で日常的に活用し、学習評価を行う上でのICTを活用する職員が増加した。活用方法に関する疑問の解決方法にも主体性が見られた。）</p> <p>②観点別評価への対応（各教科による新学習指導要領の研究や評価方法の検討の継続により、新課程科目の授業計画・評価方法の具体化が進んだ。）</p>
⑨学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT 機器の活用力について研修会の実施や支援員の活用により向上が認められる。こうした研修会等を今後も継続し、日常的活用における不得意解消に取り組んでほしい。
⑩次年度へ向けての課題	デジタルコンテンツを利用した授業実践の取り組みだけでなく、新課程科目の観点別評価に必要なデータの収集・蓄積・分析にもタブレット等ICT機器を活用する等、効率的に業務を行う方法の研究を進めていきたい。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）

①重点項目	学校生活（生徒指導）	
②重点課題	高校生としてふさわしい基本的な生活習慣や態度の育成	
③現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度、各学年での1年間の皆勤（遅刻、欠席、早退なし）の最終的な割合は約31.8%であった（1年34.0%、2年27.4%、3年34.8%）。ここ3年間で、皆勤生徒の割合が上昇してはいるが、天候や環境等の状況によつての変動を踏まえ、先を見通した余裕を持った行動がとれるようになること、時間厳守の意識を再認識するとともに身につける指導をもつとしていかななくてはならないと感じた。社会に出て行く上で時間を守るということは信頼性のある人間関係を築く上でも大切なことであり、その意味合いからも自己管理ができるように促す。 ・スマホの使用について、問題点を意識することはできているがまだ行動につながっていない。ただ年々改善の割合は上昇してきている。 	
④達成目標	各学年で1年間皆勤 （遅刻、欠席、早退なし）の生徒の割合	スマホ使用について考え、改善できた生徒の割合
	40%以上	60%以上
⑤方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員が指導場面において、生徒の時間厳守や服装に対する意識を啓発し、学校全体としてルール、マナーを守っていかうとする気運を高める。また普段から様々な機会を利用して皆勤の意義について説明し、1年ごとに学年皆勤賞をつくり表彰する。 ・昨年度、スマホ使用の改善について目標を掲げたが達成はできなかった。しかし意識づけはできたと思うので、今年度改善が見られるよう保健厚生部とも連携し、全校生徒に向けてのアンケートなどを利用して「スマホ使用ルール」を互いに指摘し合ったり、統一HRなどでスマホの使用について考えるとともに、家庭でのスマホ利用についても考える機会を設けたりし、改善を呼びかける。 	
⑥達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年での1年間皆勤率(遅刻・欠席・早退) 全体26.2%・・・資料① 1年28.7% 2年27.4% 3年22.4% (1/27現在) ・スマホの使用について改善できた 全体平均 61.1%・・・資料② 	
⑦具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・入学式や新入生オリエンテーションで安易な欠席・遅刻・早退をしないよう保護者への協力要請や生徒への指導を行うとともに、各クラスでの担任・副担任から呼びかけや注意喚起、玄関指導での声かけ等、普段の学校生活の中でも積極的に指導を心がけた。 ・生徒会や自律委員会が中心となって、統一HRでスマホ使用についての改善点を話し合あった。また、使用に関する状況をアンケートで集約した。 	
⑧評 価	C	<ul style="list-style-type: none"> ・12月以降、3学期にかけての欠席・遅刻・早退が目立った。特に3学年がかなり多く進路決定後等の生活指導について考えていかなければならないと感じた。 ・スマホの使用については昨年度から引き続いて指導したことにより、改善がみられた。
⑨学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の皆勤率向上という達成目標に加え、生徒自身が自らの生活を管理するという意識をより高める取り組みの工夫も必要ではないか。 	
⑩次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> スマホの使用も含め、基本的な生活習慣の確立や時間厳守についての再認識をさせるよう積極的に指導や声かけが必要と感じた。特に進路決定後の自己管理の必要性についての指導を担当・学年だけでなく、教職員はもちろん家庭とも連携を図りながら指導していきたい。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

① 重点項目	学校生活（保健指導）
② 重点課題	・ 基本的な生活習慣の確立と生活時間の自己管理能力向上
③ 現 状	・ 毎日の健康観察やセルフチェックを行うことができない生徒もいる。新型コロナウイルス感染拡大防止においても、自分自身の健康管理をしっかりとさせたい。また、就寝時間が遅くなり、睡眠時間も短くなっている生徒が増えている。長期休業中に生活リズムを崩し、なかなか生活リズムが戻らない生徒も少なくない。 ・ スマートフォン等を長時間利用し、学習に支障をきたしていると感じている生徒はいるものの、改善するために計画的に時間をコントロールしようと努力している生徒は少ない。
④ 達成目標	・ 健康観察記録を行い、新型コロナウイルス感染症対策を心がけ、基本的な感染対策を意識して取り組むことができる。 ・ 健康的な生活を目指し、スマートフォン等の長時間の使用を控え、適切に活用することができ、生活時間を改善できる。 (年3回の生徒意識調査で、年度当初との比較で生徒の意識改善がみられること。)
⑤ 方 策	・ 毎日の健康観察や定期的な健康セルフチェックを通して自分の生活習慣と時間の使い方を見直し、自ら考え改善できるように促す。 ・ 生徒保健委員会と生徒会、自律委員が協力し、スマホ時間を自主的にコントロールする試みを統一HRで行い、生活時間改善の意識を高める。 ・ 学校保健委員会や健康講話、保健だよりを通して生活習慣の重要性や時間の使い方について考える機会を増やし、学校と家庭の連携に努める。
⑥ 達成度	・ 健康観察記録は毎日行っている。4月から8月までは毎朝担任が配付、回収して行っていた。9月からは毎日の回収は行っていないが、12月では全校生徒の81%はほぼ毎日記録している。 ・ 生徒意識調査（健康セルフチェック）を4回（5, 7, 10, 12月）実施した結果、「課題となる項目を改善できた」、「少しは改善できた」と回答した生徒の割合が7月は72%、10, 12月はともに76%であった。各自の改善項目を設定し、健康的な生活を目指して生活時間を改善している。スマートフォン等の長時間の使用を項目にあげている生徒では、「課題となる項目を改善できた」、「少しは改善できた」と回答した生徒の割合は、7月は68%、10月は71%、12月は80%であった。
⑦具体的な 取組状況	・ 生徒保健委員が作成した新型コロナウイルス感染症対策のポスターの掲示や黙食の呼びかけなどで、基本的な感染対策を意識させた。 ・ 昨年同様、生徒が生活時間で改善したい項目の1位はメディア（スマホ、パソコン、テレビ）の時間で、2位は睡眠時間であった。そのため、スマホ時間を自主的に管理する試みとした統一HRで行い、「スクリーンタイム」アプリの紹介を行った。統一HR終了後にスマホ時間を自主的にコントロールするアプリを使ってみたいかという問いには、70%の生徒が使ってみたいと回答した。保健だよりを通して、全校生徒にアプリの紹介を行った。 ・ 学校保健委員会では、学校医の木田先生から、よりよい生活習慣を送るためにどのような生活を送ればよいかについて講演をしていただいた。この講演内容も保健だよりを通して、全クラスに掲示した。 ・ 健康セルフチェックの結果は、1月に1・2年生の各担任に渡し、1月の面接週間で役立ててもらった。
⑦ 評 価	B 新型コロナウイルス感染症対策もあり、生徒は毎日の健康チェックを通して自己管理ができている生徒が多い。 生徒がよりよい生活習慣を送るために、1月の面接週間で各クラスのスマホ使用状況等のデータを担任に示したが、毎回、学年・担任に示すことで、生徒の生活習慣を把握してもらうことができ、より細やかな指導ができたと考える。
⑨学校関係 者の意見	・ 生徒のスマートフォン等の長時間利用を減らす取り組みは評価できる。ただ、アンケート項目がメディア時間となっているので、スマホ時間に限定した方が良い。
⑩次年度へ 向けての 課 題	健康セルフチェックの分析をしっかりと行い、学年と連絡を取りながら、少しでも生活習慣が改善するようにしたい。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

① 重点項目	進路・キャリア支援										
② 重点課題	3年間を見通したキャリア教育の推進と進路実現										
③ 現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な進路目標の決定が遅い生徒や将来やりたいことがわからない生徒がいる。また、具体的な目標が定まっても自主的、意欲的に学習に取り組まず、学力不足のまま上級学校の入試をむかえる生徒も見られる。 ・自己管理のための「手帳」は3学年になると活用頻度が増えるが、学年が下がるにつれ活用しきれていない。 										
④ 達成目標	1・2年生 「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」が、系列選択や自分の生き方・考え方などの参考となったと考える生徒の割合	3年生 進路決定先に満足している生徒の割合	全学年 高校生活を過ごす上で手帳を活用できたと考える生徒の割合								
	80%以上	75%以上	70%以上								
⑤ 方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・3年間を見通したキャリア教育を計画的、継続的に行い、職業観や就業観を育み、進路意識の向上をはかる。 ・継続的な個別面談を行い、早期に進路目標を設定したり、学習意欲を喚起したりする。小杉高校GP自己評価を行い、その結果を個人面談や進路指導に活かすことで、多様な生徒の進路実現につなげる。 ・「手帳」を活用することにより、スケジュール管理をし、自分の行動を振り返る習慣を身に付け、自ら学び主体的に行動できる生徒を育成し、生徒の進路実現を目指す。また、タブレットPC等のデジタルツールの効果的な活用方法を探る。 										
⑥ 達成度	<p>「はい、どちらかというとはい」と回答した生徒の割合（1、2年のみ2学期末調査）</p> <table border="1"> <tr> <td>学年別達成目標</td> <td>1年 94.1%</td> <td>2年 72.5%</td> <td>3年 84.2%</td> </tr> <tr> <td>全学年共通達成目標</td> <td>1年 33.1%</td> <td>2年 15.6%</td> <td>3年 56.5%</td> </tr> </table>			学年別達成目標	1年 94.1%	2年 72.5%	3年 84.2%	全学年共通達成目標	1年 33.1%	2年 15.6%	3年 56.5%
学年別達成目標	1年 94.1%	2年 72.5%	3年 84.2%								
全学年共通達成目標	1年 33.1%	2年 15.6%	3年 56.5%								
⑦ 具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・産業社会と人間と総合的な探究の時間に上級学校訪問、大学学部学科調べ、職業研究、系列科目登録説明会、県外進路研修、社会人班別講話、進路ガイダンス等を実施し、生徒の系列選択や進路意識を高めた。 ・1年生に対しては、新入生オリエンテーションを通して、手帳の活用を呼びかけ、各授業や担任との面談時に持参するように促した。 										
⑧ 評 価	B	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育関連の目標について、1年生は達成、2年生もほぼ達成したといえる。合否判定待ちの生徒や一般受験の生徒等が未回答だったが、3年生の進路目標は達成した。 ・手帳の活用については低い結果となった。3年生は半数を超えたが、1、2年生は目標に遠く及ばず、とりわけ2年生が手帳を活用しきれていなかったようである。 									
⑨ 学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・手帳を活用し、メモをとる習慣を身に付けさせることは大切である。活用力を向上させるためには、教員側から具体例を提示し、利用方法を教える必要がある。 										
⑩ 次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の3年間を見通したキャリア教育は生徒の進路実現に大いに貢献しているので、次年度以降も継続していきたい。 ・手帳に関しては、タブレットPCを授業で持参する生徒も増えてきていることもあり、手帳と競合している面もある。見通しをもって高校生活を送るためにも、学級や教科の時間に常時携帯させ、メモすることを意識させていきたい。デジタルツールも有効に活用させていきたい。 										

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

①重点項目	特別活動	
②重点課題	特別活動やボランティア活動など生徒の自主的な活動の充実	
③現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事やホームルーム活動、委員会活動において生徒会役員やクラス委員を中心に新たな企画の提案や取り組みを意欲的に行っており、主体的に活動する機会が増えている。 ・部活動やボランティア活動に熱心な生徒がいる一方で、特別活動が学校生活を充実させたという意識が低い生徒が1割以上いる。 	
④達成目標	学校行事や各種特別活動に自主的に取り組み、自己達成感を持つ生徒の割合	学校生活を充実したものにするために、実際に行動したことがある生徒の割合
	90%以上	90%以上
⑤方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会執行部と各委員会・クラス・部活動などが連携して活動を企画し、組織としての生徒会活動をより活性化させ、生徒の参加意欲を高める。また、体育大会、学校祭等学校行事では「一人一役」とし、役割意識を高めるとともにリーダー育成に努める。 ・部活動に関する問題点を洗い出し、自主的な運営方法など改善策について検討する。 ・校外清掃活動や地域行事への参加など生徒が人々の役に立ち喜ばれる機会を設けるとともに、ボランティア活動に関する情報をできる限り発信し参加する機会を増やす。 	
⑥達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・自己達成感を持つ生徒の割合は、体育大会と部活動から考察した。資料①より、体育大会では、満足度97.2%、役割意識94.4%であった。ただ、前年との比較では役割意識の割合は低下している。役割の分担や内容について工夫の余地があると考ええる。また、資料②③より、部活動では、加入者の中での満足度は90%であった。しかし、1年生の不満が多いことや無所属の割合が高いことが気付きである。 ・実際に行動したことがある生徒の割合は、資料④の結果から考察した。特になしと答えた生徒が40人であることから、それ以外の90%以上の生徒は、何かしら行動したと考えた。時間や手間をかけた活動がプラスに繋がると考える生徒が多いことは喜ばしい。こういった活動が、生徒個々の今後の活動や行動力に影響を与えると考える。また、特になしと答える生徒が2年生に多い。 	
⑦具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・体育大会では、「一人一役」となるように部活動ごとに役割を分担した。当初、部活動に未加入の生徒にも分担していたが活動ができなかった。そのことも、役割意識の低下に関連していると思われる。 ・生徒会活動では、生徒会執行部と委員長が定期的集まり、情報を共有する機会を今年度も継続して実施している。関わる人が増えることで、活動にも広がりが出ている。 ・生徒玄関に置かれている生徒会のホワイトボードは広報活動の一翼を担っている。生徒にも定着してきており、登校時に足を止めて見ている生徒もいる。今年度は、企画や活動、ボランティアの案内はもちろん、事後報告のスピードを重視して発信している。 ・ボランティア活動では、1・2年生が全員で行う地域清掃がある。本来の形ではないが、活動することでボランティア活動に関心を持つ生徒が増加してほしいと考えている。外部の活動に参加する生徒も出てきている。(こども食堂、キャンプ補助等) ・部活動の顧問は、各部2人以上の体制をとっている。時間がある限り見てほしいこと、活動できる時間を保障してほしいことを年度当初に確認している。 	
⑧評 価	B	2つの達成目標について、両者とも今後の課題を残す面はあるが、数値的な目標はクリアしている。このことから、目標はほぼ達成したと考えた。
⑨学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も地域清掃をはじめとして地域の施設や行事に対するボランティア活動を幅広く展開することで、キャリア支援とも結びつけながら生徒の達成感を高めてほしい。 	
⑩次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート等の結果から、生徒は自分が動いたことや関りが強いものについて、ポジティブな感情を持つことが推察される。効率や負担を配慮しすぎて生徒の活躍の場を奪うことがないように教員と生徒の役割分担も考えていく必要があると思われる。 ・生徒会執行部は半期でメンバーが変わる。全員が一新されるということはないが、毎回一進一退を繰り返すことが多い。 ・部活動の在り方が難しいときを迎えている。各部、それぞれが求める部活動の形づくりをすることが求められているが、なかなか難しい。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)